

# キチガイ地獄

夢野久作

青空文庫



……ヤツ……院長さんですか。どうもお邪魔します。

ええ。早速ですが私の精神状態も、御蔭様おかげさまでヤツト回復致しましたから、今日限り退院させて頂こうと思ひまして、実は御相談に参りました次第ですが……どうも永々御厄介ごやっかいに相成りまして、何とも御礼の申上げようがありません。……ええ。それから入院料の方は、自宅うちへ帰りましてから早速、お届けする事に致したいと思ひますが……。

……ハハア……いかにも。なるほど。事情をお聞きにならない事には、退院させる訳には行かぬと仰おっしゃ有るのでね。イヤ。重ごもつと御尤もです。それでは事情を一通りお話し致しますが……し

かし他人<sup>ほか</sup>へお洩らしになつては困りますよ。何しろ私の生命<sup>いのち</sup>にかかわる重大問題ですからね……。

ナル……成る程。患者の秘密を一々ほかへ洩らしたら、医者 of 商売は成り立たない。特に病院というものは、世間の秘密の保管倉庫みたようなもの……イヤ。御信用申上げます。御信用申上るどころではありません。

それでは事実を打ち割つて告白致しますが、何を隠しましょう、私は殺人犯の前科者です。破獄逃亡の大罪人です。婦女を誘拐<sup>ゆうかい</sup>した愚劣漢であると同時に、二重結婚までした破廉恥<sup>はれんち</sup>極まる人非人……。

イヤ。お笑いになつては困ります。そんな風にお考え下さるの

は重々感謝に堪えない次第ですが、しかし事実を枉まげる事は断然出来ませぬ。御承知の通り現在、只今の私は、北海道の炭坑王と呼ばれていた谷山家の養嗣子ようしし、秀磨ひでまろと認められている身の上ですからね。私の実家も、定めし立派な身分家柄の者であろうと、十人が十人思っておられるのは、むしろ当然の事かも知れませんが、遺憾ながら事實は丸で正反対……と申上げたいのですが、実はもっとヒドイのです。その証拠に、私が谷山家に入込みました直前の状態を告白致しましたら、誰でも開いた口が塞がらないでしょう。

私は大正×年の夏の初めに、原因不明の仮死状態に陥ったまま、北海道は石狩川の上流から、大雨に流されて来た、一個のルンペ

ン屍したい体に過ぎなかつたのです……しかも頭髮や鬚を、蓬々ぼうぼうと生はやした原始人そのままの丸裸まるはだか体で、岩石の擦り傷こすや、川魚の突つき傷を、全身一面に浮き上らせたまま、エサウシ山下の絶勝に臨む、炭坑王谷山家の、豪華を極めた別荘の裏手に流れ着いて、そこに滞在していた小樽タイムスの記者、某ぼうの介抱を受けているうちに、ヤツト息を吹き返した無名の一青年に過ぎなかつたのです。

イヤ。お待ち下さい。お笑いになるのは重々ごもつと御尤もです。話が一々脱線し過ぎておりますからね……のみならずこの話は、谷山家の内輪うちわでも絶対の秘密になつておりますので、御存じの無いのは御尤も千万ですが、しかし私は天地神明に誓つてもいい事実

ばかりを、申上げているのです。イヤ。まったくの話です。そればかりじゃありません。只今から告白致します私の身の上話を、冷静な第三者の立場からお聴きになりましたら、それこそモットモット非常識を極めた事実が、まだまだドレくらい飛び出して来るかわからないのです。……ですから、そんなのを一々御心配下すつたら、折角の告白がテンキリ型なしになつてしまうのですが、しかし同時に、それがホントウに意外千萬な、奇怪極まる事実であればあるだけ、それだけ谷山家の固い秘密として、今日まで絶対に外へ洩れなかつたもの……という事実だけはドウカお認めを願いたいと思うのです。殊に内地と違ひまして未開野蛮な……むしろ神秘的な処の多い北海道の出来事ですからね。その辺のとこ

ろを十分に御斟酌しんしゃく下すつて、お聴き取りを願いましたならば、

このお話がヨタか、ヨタでないか……精神病患者のスバラシイ幻イリユウジョン

想か、それとも正気の間人が告白する、明確な事実譚ものがたりかとい

いうことは、話の進行に連れて、追々おいおいとおわかりになる事と思  
いますからね。

……とところでです。その小樽タイムスの記者某と、近隣の医師  
の介抱によりまして、ヤット仮死状態から蘇生しました私は、ど  
うした原因かわかりませんが、自分自身の過去に関する記憶を、  
完全に喪失しておりましたのです。もっともその当時は、私の頭  
にヒドイ打撲傷が残っておりましてので、多分、どこか高い処か  
ら落っこつて、頭を打った瞬間に、ソナ変テコな状態に陥った

ものじゃなかったかと、今でも思っている次第ですが……しかし  
コンナ实例は、先生の方が失礼ながら、お詳しい事と存じますが  
……。

……ハハア。そんな实例を見た事は無いが、話にはよく出て来  
る。真面目な事実として在り得るかも知れない……成る程。とに  
かくそれから後のちというものは、その記者某から指導されるまに  
まに、自分自身の過去を、すっかりカモフラージュしておりまし  
た……。

……自分は九州佐賀の生れで、親も兄弟も無い孤児である。む  
ろん学問という学問もしていないが、最近、東京で事業に失敗し  
て、この世を悲観した結果、人跡未踏の北海道の山奥で自殺して、

死骸を熊か鷺の餌食えじきにするつもりで、山又山を無茶苦茶に分け登つて行くうちに、過あやまつて石狩川に陥入つたもの……。

とか何とかいったような出鱈目でたらめで、別荘附近の人々を胡魔化ごまかしてしまいました。それから伸び放題になつていた頭をハイカラに手入れして、見違えるようなシヤンに生れ変わりましたが、併しソナナ風にして生れ変わりは変つたものの、モトモト行く先も帰る先も無い、風来坊の身の上でしたから仕方ありません。その記者ねまきが寝間着ねまきにしていた古浴衣を貰い受けまして、その別荘の御厄介になりながら、毎日毎日ボンヤリしていた訳でしたが……。

……エツその新聞記者の名前ですか。

……ええつと……。オヤツ。おかしいな……。何とかいったつけ

が……ツイ今サツキまでハツキリと記憶おぼえていたんですが。……オカシイナ……ツイ胴どうわす忘れしちやつてチヨツト思い出せないんですが。エツ。何ですって……。

生命いのちの親様の名前を忘れるなんて、言語道断だと仰おっしや有るのですか……ト……飛んでもない。アンナ奴が生命いのちの親様なら、猫イラズは長ながいき生の妙薬でしょう。

私が前に申しましたような、容易ならぬ大罪人の前科者という事実を、早くもその時に看破するや否や、一種の猟奇趣味の満足のためとしか思えない、極めて残忍な方法でもって、私の運命を手玉に取るべく、ソロソロと手を伸ばしかけていた悪魔というのは、誰でもない。その生命いのちの親様だったのです。谷山家の獅子身

中の虫となつて、私を半狂人はんきちがひになるまで苦しめ抜く計画を、冷静にめぐらしていたケダモノが、その新聞記者だったのです。：  
：ええ……：そうですね。それじゃソイツの名前を思い出すまで仮りにAとでも名付けて、お話を進めておきますかね。

何でもそのAという男は、谷山家の内情に精通している、お出入り同様の新聞記者で、熊狩や、スケートの名人だと自称しておりました。それは恐らく事実だったのでしよう。体格のいい、色の黒い、眼の光りの鋭い、如何いかにも新聞記者らしいツンとした男でしたがね。そんな風にして私を、谷山家の別荘に引止めながら、色んな事を質問したり、話しかけたりして、私の記憶を回復させよう回復させようと努力していたようです。

ええ。もちろんそうですね。とりあえず私の記憶を回復させた上で、素晴らしい新聞種を絞り出してくれようと思っていたに違い無いのですが、生憎あいにくなこととその結果は、全然、徒労に帰してしまいました。私の脳髓から蒸発してしまった過去の記憶は、モウ疾とつくにシリウス星座あたりへ逃げ去っていたのでしよう。それから後のち、容易な事では帰って来なかつたのですが……。

もっともその時に万一、私が過去の経歴を思い出していたら、話はソレツ切りで、目出度めでたし目出度しになっていたかも知れません。アンナ空恐ろしい思いをさせられないまま、音も香かもなく土になってしまったかも知れないのですがね……。

それから約二週間ばかり経った、或る暑い日のことでした。炭坑王、谷山家の一粒種の女主人公で、両親も兄弟も無い有名な我儘者で、同時に小樽から函館へかけた、社交界の女王と呼ばれていた、龍代さんと称する二十三歳になる令嬢が、小母さんと称する、中年の婦人を二三人お供に連れて、愛別から出来た新道をドライブしながら、突然に、エサウシ山下の別荘へ遣つて来たのです。そうして私は間もなく、その令嬢のお眼に止まる事になったのです……ええ。そうなんです……お話のテムポが非常に早いようですが、事実ですから致し方ありません。尤も後から聞いてみますと、その我儘女王の龍代さんは、小樽の本宅に廻つて来たA記者の報告によつて、私の事を承知するや否や、たまらない

好奇心に馳かられたらしく、何も彼かも放ほつたらかして、私を見に来たものだそうですが、しかも来て見るや否やタツタ一眼で、氏うじも素性も知れない風来坊の私を捉まえて、死んでも離さない決心をしたというのですから、その我儘さ加減が如何はなはだに甚しいものがあったかが、アラカタお察し出来るでしょう。

……どうも惚のろけを申上るようで恐れ入りますが……しかし又一方に、私も私です。只今申しました通りに過去の記憶を喪失なくしていることをハッキリ自覚していたんですから、万一、ズット以前に約束した女が居はしなかったか……ぐらいの事は、その時にチヨット考えてみる必要があつたかも知れないのですが、ミジンもそんな事に気が付かずに……むろん私共うしろの背後で、Aが赤い舌を

出していようなぞとは夢にも気付かないまま、妖艶ようえん澆刺はつらつを極めた龍代の女王ぶりに、魂を奪われてばかりおりましたのは、何といつても一生の不覚でした。或はこれが運命というものだったかも知れませんがね。……ハハハ……。

その結果は、改めてお話する迄もなく、世間周知の事実ですから略させて頂きます。ただ私がその龍代の超特級な我儘と、A記者の不思議なほど熱心な仲介に依りまして、谷山家の養子に納まる事になりますと、何よりも先に驚かされた事実が三つありました事を、念のため申上げておきましょう。

その第一というのは、さしもに北海道切つての放埒者ほうらつものと呼ばれていた龍代が、意外にも処女であつた事です。それから第二は

やはりその龍代の性格が、結婚後になると急に一変して、極めて  
温良貞淑な、内気者に生れかわってしまったことです。

それから今一つは少々さもしいお話ですが、流石さすがの炭坑王、谷  
山家の財政が、その当時の炭界不況と、支配人の不正行為のため  
に、殆んど危機に瀕ひんする打撃を受けていたことでした。……です  
から詰るところ私は、龍代に見込まれたお蔭で、泰平無事の風来  
坊から一躍して、引くに引かれぬ愛慾と、黄金の地獄のマン中に、  
真逆まつさかさま様に突き落された訳で……しかもそれは私のような馬鹿を  
探し出すために、心にも無い放埒振りを見せていた龍代の大芝居  
に、マンマと首尾よく引掛けられた物……という事が結婚後、半  
年も経たないうちに判明して来たのです。

しかし一方に私も今更、そうした二重の地獄から逃げ出すような、臆病者ではありませんでした。この点でもやはり龍代の見込みが百パーセントに的中していたのかも知れませんが、元来、風来坊の川流れであつた私が、それから後のちというものは、龍代にも負けないくらい性格の一変ぶりを見せましたもので、どこで得た知識かわかりませんが、自分でも驚くほどの才能を發揮し初めたものです。

何よりも先に、今申しました悪支配人をタタキ出して、危機に瀕した谷山家の財政をドシドシ整理して行く片手間に、その当時まで誰も着眼していなかつた、にしん鯨の倉庫業に成功し、谷山くんせい燠製にしんの販路を固めて、見る見るうちに同家万代の基礎を築き初め

ましたので、谷山一家の私に対する信頼は弥いやが上にも高まるばかり……そういう私も時折りは、吾れながらの幸福感に陶醉しいしい、モットモット優越した将来の夢を、妻の龍代と語らい誓った事もありました。

併しかし今から考えますと、ソウした幸福感はホンノ束つかの間の夢だったのです。私の一身に絡からまる怪奇な因縁は、中々ソレ位の事おしまい終結にはなりませんでした。

それは私共の間に、長男の龍太郎が生れてから、一年と経たない中うちの事でした。

妻の龍代が突然に……それこそホントウに突然に、カルモチン自殺を遂げてしまったのです。同時にその遺書かきおきによって、谷山

家の内輪の人々が何故なにゆえに永い間、龍代の放埒と我儘を見て見ない振りをしていたか……のみならずこの馬の骨か、牛の糞くそかわからない風来坊の川流れを、よく調べもせず炭坑王後継者として承認したか……という理由がハッキリ判明わかったのですが……斯か様申ようしましたら先生は、もうアラカタ事情をお察しになっているでしょう。

谷山家は、容易に他家と婚姻出来ない、忌いまわしい病気を遺伝した家柄なのでした。そうしてその血統と、財産とが、同時に絶滅しかけていたところを、私のお蔭で辛うじて、繋つなぎ止めたという状態なのでした。

ところがその危なっかしい血統が、龍太郎の誕生によってヤツ

ト繋ぎ止められたと思う間もなく、龍代自身の肉体に、早くもその忌いまわしい遺伝病の前兆が、あらわれ初めたことがわかりましたので、まことに申訳無いが貴方に……つまり私にですね……情ない姿をお見せしないうちにお別れする決心をしました。これがわたし妾の最後の我儘ですから、何卒なにとぞおゆるし下さい。……妾は貴方を欺だますまいとした妾のまごころを、欺し得ないで貴方と結婚しました。その深い罪のお詫たとえびは、仮令、この儂はかない玉の緒おが絶えましてもキットお側に付添ついでうて致します。……お別れしたくない……子供の事をくれぐれ呉々もお願いします。妾のまごころをタツタ一人信じて下さる貴方のお心に、おすが継りして死んで行きます。今はただ天道様の無情を怨うらむばかり……といったような、それはそれは

哀切を極めたものでしたが、その文句には全く泣かされましたよ。ハハイ。昔の我儘はアトカタもない。……透きとおるほどの純情と、理智とに責められた……弱々しさと美しさとに満ち満ちた……ハハイ……。

むろんその時も私は、谷山家を出る考えなんか毛頭もうとうありませんでした。ハイ。世の中の事はすべて運命ですからね。

しかし谷山家の連中はその時に、トテモ狼狽いかしたらしいのです。何しろ、一生懸命になって秘しかく匿かくしていた、谷山家の忌いまわしい血統が、龍代の自殺をキツカケにして、世間に暴露しそうになったのですからね。警察と新聞社に頼み込んで極力、事情を秘密にしてもらう一方に、今となって私に逃げられては一大事と思ったの

でしよう。出来るだけ早く、私の氣に入るような後妻を探してやらなければ……といったような話が、まだ龍代の百ヶ日も済まないうちから、谷山家の内輪で真剣に進められる事になりました。つまりそんな連中の私に対する信賴が、イヨイヨ明日に裏書きされる段取りになって来た訳ですが、サテそれでは誰がいいか、彼がいいか……といった具体的なところまで話が進んで参りますと、不思議な事に、私の氣がドウしても進まなくなって終しまったのです。前に龍代と一所になった時分とは、何だか氣持が違うように思われて来たのです。しかもそればかりでなく、そうした氣持を自身でよくよく解剖してみますと、それは死んだ龍代に氣兼ねをした氣持でもなければ、子供の将来を心配した訳でもないように

思われるのです。なぜ気が進まないのか、自分でも判然はつきりしないまんまに、何だか恐ろしく気が咎とがめるような……何かしら大切な事を忘れているのを、ヤツト思い出しかけているような気がしてなりませんので、実際、吾れながら妙チキリンな自烈度じれつたい気持ちになつてしまったものです。ですから私は親類達への返事をいい加減にして突然、旅行に出かけたり何かしながら、色々と、その理由を考え廻してみたものですが、解らないものはイクラ考えたつて解る筈がありません。のみならず、その結果スツカリ憂鬱ゆううつになつてしまった私は、トウトウ皆をビックリさせるような事を仕し出来でかしてしまいました。……つまり何となく石狩川の上流に行つてみたい。どこだかわからないが自分の故郷は、石狩川の上流に

在るような気がするから、そこに行つてみたら、何もかも解るに  
違い無い……といったような、タマラない悲壮な気持になりました  
たので、人知れず小型のキャンバスボートや、食料などを買込みま  
して、無断で家を飛出しますと、一直線にエサウシの別荘に向つ  
たものです。すると又、生憎あいにくなことに、ズツト以前から、私の  
そうした素振りを不審に思つて、気を付けていた者が、家の中うちに  
居りましたので、難なく途中で押えられて、小樽へ引戻されてし  
まったものですが……しかし先生はモウ疾とつくに、私のそうした  
気持を察しておいでになるでしょう。……ねえ先生。先生はソ  
ナ病症の経過をイクラでも御存じでしょう。そうした不可思議極  
まる潜在意識の作用を、知り尽しておいでになるでしょう。

ハハア。西洋の古い記録にはそうした実例が出ているが、先生御自身にはソナ患者を御覧になった事が無い……それはいい都合です。私はソナ実例の中でも特別<sup>あつち</sup>譚えの標本ですからね。

何を隠しましょう、今朝<sup>けさ</sup>の事です。しかもタツタ今の出来事です。私は病室の床の上にこぼれていた茶粕の上で、ウツカリ足を踏み<sup>すべ</sup>込らして、ヒドク尻餅を突いたのでありますが、そのトタンに、トテモ素晴らしい大事件が持上ったのです。永い間忘れていた過去の記憶……石狩川に陥ち込んだ以前の、身の毛も竦<sup>よだ</sup>立つ記憶の数々が、一ペンにズラリツと頭の中で蘇<sup>よみがえ</sup>ってしまったのです。同時にモウこれで私は、自分の頭の故障から完全に解放された……と気が付きましたので、早速ながらこうして、退院のお許しを受け

に参りました次第ですが……。

ハイ……実を申しますと、この秘密をお話しするのは、私にとって身を切られるよりも辛いのです。むろん社会的にも、モノスゴイ反響を喚よびおこ起すに違いない重大事件ですから、万一、公表でもされますと、私を中心とする一切合財が、破滅に陥るかも知れないと思われるのですが、しかし私自身の一生涯が、この病院のうち中で埋れ木になるか、ならないかの境い目と思えますから、背に腹は換えられない気持ちで、先生にだけソツとお打明けする次第ですが……ハイ……ハイ……ハイ。

先生はズツト前に、誰からか、コンナ話をお聞きになった事がありません。

北海道は石狩川の上流、山又山のその又奥の奥山に、一軒の原始的な小舎こやが建っているのが見える。その家は北面の背後を、旭岳に続く峨々ががたる山脈に囲まれている一方に、前面は切立ったような、石狩本流の絶壁に遮さえぎられていて、人間業わざでは容易に近付けない位置に在るので、ツイこの頃まで、誰にも発見されないままになつていたものらしい。

ところが最近に到つて、北海道特有の薬草採とりが、霧に出会つて山道に踏み迷つた結果、偶然に、遠くからこの一軒屋を発見してからというもの、急に評判が高くなつて、北海道中に拡がつてしまつた。……その一軒家は、まだ誰も知らないアイヌ部落の離れ小舎こやだろうと云う者が居る。一方に、それは北海道名物の、監

獄部屋から脱出した人間が、復讐しかえしを恐れて隠れているのだ……  
 といったような穿うがつた説が出るかと思うと、イヤそうではあるま  
 い。ことによるとそれは、太古以来生き残っている原人の棲家すみかか  
 も知れない……なぞと云い出す凝り屋こやも居る。そうかと思うと……  
 ……ナアニそれは薬草採りが見当違いをしたんだ。大方北見境ぎかいに居  
 る猟師の家を遠くから見たんだろう……なぞと茶化ちやかしてしまう者  
 も居る……といった塩梅あんばいで、サツパリ要領を得ないままに、噂  
 ばかりがヤタラに高まつて行つた。

そのうちにその評判が、トウトウ新聞社の耳に這入はいると、イヨ  
 イヨ騒ぎが大きくなってしまった。結局Aが奉公していた小樽夕  
 イムスの政敵、函館時報社の飛行機で撮影された、その家の鳥ちよう

瞰<sup>かん</sup> 写真が、紙面一パイに掲載されることになったが、その写真をよく見ると、それは明らかに日本人が建てたらしい草葺<sup>くさぶき</sup>小舎で、外国映画に出て来る丸太小舎<sup>ログケビン</sup>式の恰好をしているばかりでなく、純日本式の野菜畑や、西洋式の放射状の花畑なぞが、ハッキリと映っているところを見ると、皆の想像とは全然違つた文化人の住居<sup>すまい</sup>に違いない。しかも、それでいてその位置はというと、確かに、北海道の脊<sup>せきり</sup>梁<sup>りょう</sup>山脈の中でも、人跡未踏の神秘境に相違ないのだから、その一軒家<sup>なんびと</sup>が何人の住家であろうかは、容易に推測されない訳である。奇怪……不思議……といったような事実が、同乗の記者によつて詳細に報道された。そうしてそのまま猟<sup>り</sup>奇<sup>き</sup>の輩<sup>ともがら</sup>の口端<sup>くちばし</sup>に上つて、色々な臆説の種になっているばかりで

ある……という事実を、先生は多分、何かの雑誌か、新聞で御覧になった事でしょう。ハハア。まだ御覧にならない……。御研究がお忙しいのでね。成る程……。それでは致し方がありませんが、何を隠しましょう、その一軒屋こそ、私が建てた愛の巣なのです。私が妻子と一所に、楽しい自給自足の生活を営んでいた、第二の故郷に相違ないのです。……イヤどうも……。御免下さい。どうも胸が一パイになりました……。ハハイ……。ハハイ……。私は石狩本流の絶壁から墜落したトタンに、そうした記憶をスツカリ喪<sup>うしな</sup>つていたのです。ええええ。事実ですとも事実ですとも……。

私の戸籍が偽物であることは、私の生れ故郷の村役場に御照会下されば一目瞭然することです。その戸籍面を偽造して、私を初

め谷山一家の人々を欺いていたのが、誰でもない、新聞記者のA  
だったのですからね。

私が二度目の結婚問題に差し迫られたまま、旅行にカコ付けて  
家を飛び出したのも、かつは誰にも知れないようにAに面会して  
みたかったからでした。Aはその頃、小樽タイムスを罷やめて、九  
州地方をウロ付いているという噂でしたからね。何かしら私の過  
去に就いて、探りに行ったのじゃないか……といったような気が  
したからです。それから二度目に、モウ一度家を脱け出した時も、  
そうした潜在意識に支配されていたのでしよう。何となく石狩の  
上流に行ってみたい。そうしたら何もかもわかるに違い無い……  
といったような気持になったからでした。

併し、最早そんな無駄骨折をする必要は無くなりました。私が完全に過去の記憶を回復しているのですからね……同時に、そのお蔭で、谷山家の養子事件を裏面からアツリ廻して来た、冷血残忍なAの手の動きを、ハッキリと見透かしながら、お話する事が出来るのですからね……。

私は福岡県朝倉郡の造酒屋、畑中正作の三男で、昌夫と呼ばれていた者です。父の持山に葡萄を栽培するのが目的で、駒場の農科大学に入学して、卒業間際になっていた者ですが、九州人の特徴として、器量も無い癖に政治問題の研究に没頭した結果、当時の大政党憲友会の暴状に憤慨し、同会総裁、兼、首相であった白原圭吾氏を暗殺して終身懲役に処せられ、北海道樺戸の監

獄に送られて間なく脱獄し、爾来、杳として消息を絶つていた者……と申しましたら、その他の細かい履歴は申上げずとも宜しいでしょう。暗殺、逮捕、脱獄の前後を通じて、全国の新聞紙に仰々しく掲載されていたものですかからね……。

しかしその中に唯一つ、私の脱獄の理由として新聞紙上に伝えられていたものが皆、飛んでもない間違いばかりであつた事は、誰も気付かないでいるでしょう。再度の暗殺決行とか、社会主義的潜行運動のためとか、又は露西亚への逃亡のためとかいったような風説が皆、御念の入つた当てズツポーばかりで、天下を聳動した私の脱獄の動機なるものが、実は他愛もないモノであつた事を知っている人間は、そう沢山には居ない筈です。

私が樺戸に落付いてから間もなくの事でした。東京で恋の真似事をしておりました女給の鞆ともえだ岐久美子というのが、遙々、北海道まで尋ねて来て、思いがけなく面会に来てくれたのです。

この事実は間もなく新聞紙上に伝えられまして、活動写真にまで仕組まれたそうですから、御存じの方もありましようが、何を隠しまししよう。私はその時に、彼女から受けました巧妙な暗示と、係官に怨恨うらみを抱いておりました同囚の者の同情とに依りまして、何の苦もなく脱獄を決行する事が出来たのです。……しかもその脱獄の方法というのが、特に私の生命に拘かかわる重大問題でありまして、同時に同囚の恩人たちにも、非常に迷惑のかかる話です。……ら、こればかりはこの口を引裂かれてもお話出来ないのです。……

…が…ともかくもそのような事情で、首尾よく逮捕の手をのがれました私は、彼女と共に石狩川の下流を越えまして、例の絶対安全の神秘境に恋の巢を営むことになったのです。

もつともコンナ風に話して参りますと、何のことはないお伽話<sup>ななし</sup>みたような筋道になってしましますが、併し<sup>しか</sup>、そこまで来る間の私共の辛苦艱難<sup>かんなん</sup>と、それから後の孤軍奮闘的生活<sup>のち</sup>といったら、優<sup>まさ</sup>にロビンソン・クルーソー以上の奇談を綴るに足るものがあつたのですよ。

私は樺戸を脱出するとそのまま、持って生れた健脚を利用して、山又山を逃げ廻りながら、一心に久美子の行衛<sup>ゆくえ</sup>を探索し初めたものです。無論囚人服を着たままですから、夜しか人里に出られな

かった訳でしたが、私は盗みというものを絶対にしない方針でしたので、どこまでも青いお仕着せ姿しきで、鳥獸と同じ生活をして行かなければなりませんでした。ですから、その最初の間の苦しみというものは、実に想像の外でしたが、併し又一方から申しますと、そうした辛棒のお蔭で、私の逃げ足が絶対にわからなかったのですから、詰るところ差引の損得は無かったかも知れません。のみならずその辛棒の甲斐かいがありました、脱獄してから一個月目に、新旭川附近の只とある村外れで、彼女が私に暗示していた、小さな奇術劇団の辻ビラがブラ下っているのを発見しました時の、私の喜びはドンナでしたらう。たちま忽ち勇氣を百倍しました私は、アラウル危険を物ともせず、折からの暗夜やみよに紛まぎれて、旭川の町に

かかっているその劇団に付き纏まとうたものでしたが、そのうちに、トウトウ彼女と連絡を取ることに成功しますと私は、迅速に手筈をきめまして、一気に彼女を引っ張り出してしまったのです。

その時に生命いのちと頼むものは、大急ぎで彼女に買集めさせた一挺の鋏くわと、一本の洋刀ナイフと、リュックサックに詰めた二つの鍋と、六貫目ばかりの食料だけでした。その以外には何の準備も出来ない囚人服のまま、舞台裏から飛出して来たばかりの、金ピカ洋装の彼女と手に手を取って、涯はてしない原始林の奥を目がけて、盲めくら滅めつぼう法ほうに突進したのですからね。恋は盲目と申しますが、これくらい思い切った盲目ぶりはチョットほかに類が無いでしょう。しかもその途中では、深山幽谷に慣れた薬草採りでも震え戦おのく、

寒い寒い霧に包まれて、二日二晩も絶食したまま、土の中に穴を掘って潜り込んだり、又は背丈よりも高い灌木林を、一反歩以上も掻き散らして、木の根を掘った餓え熊の爪の跡を見て、モウ運の尽きだと諦めて、二人で抱き合って泣き出したり、それはそれは喜劇とも悲劇とも付かない情ない目や、恐ろしい目に何度会ったものかわかりません。

ところでそのような次第で、木の実櫃かやの実を拾いながらヤツトのことで、念がけていた人跡未踏の山奥に到着しますと、私は辛苦艱難をして持って来た鍬と、ナイフで木を伐り倒して、頑丈な掘立て小舎を造り、畠を耕して自給自足の生活を初めると同時に、小川の魚を釣って干物にしたり、木の実を煮て苞つとに入れたりして、

冬ふゆ籠もりの準備を初めました。

二人はそこで初めて、この上もなく自由な、原始生活の楽しさを悟ったのです。科学、法律、道徳といったような八釜やかましい条件に縛られながら生きている事を、文化人の自覚とか何とか錯覚している馬鹿どもの世界には、夢にも帰りたくなくなつたのです。

二人は約束やくそくしました。……二人はこれから後のちイクラ子供が出来ても、年を老とつても、モウ人間世界へは帰るまい。アダムとイブが子孫を地上に繁殖させたようにして、吾々の子孫をこの神秘境に限りなく繁殖させよう。自然のままの文化部落を作らせよう……と……。

彼女はそれから年とし児ごを生みました。私が二十一の年から二十五

までの間に、男の児と女の児を二人宛ずつ、都合四人の子供を生みましたが皆、病氣一つせずに成長しましたので、山の中が次第に賑にぎやかになって参りました。

ところが忘れもしませんその二十五の夏の事でした。最前お話ししました新聞社の飛行機が、突然に私の家うちの上を横切りましたのは……。

その時の子供たちの脅おびえようといったらありませんでした。ちようど私は家うちの前の草くさはら原に、放射状の花壇を作つて、山から採つて来た高山植物を植えかけておりましたが、思いがけない西北の方角から、遠雷のような物音が近付いて来ますと、踊るような恰好をして逃げ迷っている子供等と一所に、慌うちてて家の中へ逃げ

込んだものです。そうして軒のきした下に積んだ寢床用の枯草の中から、青い青い石狩岳の上空に消え失せて行く機影を見送っているうちに何か知らタマラない不吉な予感に襲われましたので、ホーツと溜息を吐ついておりますと、その背後から久美子もソツと不安気な顔をさし出して、

「妾わたし達を探しに来たのじゃないでしょうか」

と云ったものです。それを聞くと私は、思わずドキンとしましたが、しかし顔ではサリ気なく微笑しまして、

「ナアニ。俺たちみたような人間を探すのに、ワザワザあんな大袈裟な事をするもんか。しかも今頃になって……ハハハ……」

と打消すには打消したものの、それでも押え切れない不吉な胸

騒ぎをドウする事も出来ないまま、立ち竦んでいたことでした。  
私はそれから後<sup>のち</sup>、四五日の間というもの、ドウしても遠くに出<sup>で</sup>歩<sup>あ</sup>るく気がしなかつたものです。むろん写真まで撮られていようなぞという事は、夢にも気付きませんでしたので、ただ、私共の居る神秘境をダシヌケに掻き乱して行つた巨鳥の姿を、思い出しては溜め息しいしい、家<sup>うち</sup>の周囲の畠ばかりをいじくつていたものですが、そのうちに又、眼の前に差迫っている冬籠<sup>ふゆごも</sup>りの用意の事を思出しますと、何がなしにジツとしては居られなくなりましたので、お天気の良いのを幸いに、手製のタマ網を引つ担<sup>かつ</sup>いで、鱒<sup>ます</sup>をすくいに出かけました。

久美子はその時にも、不安そうな顔をして私を引止めましたが、

矢張り虫が知らせたとしても申しましようか。それを振り切つて山を下りまして、べにやまざくら紅山桜や、桂の叢林を分けながら、びようぶ屏風を切り立つたような石狩本流の崖の上まで来ますと、なまき生木の皮で作つた丈夫な綱をブラ下げまして、下の石原に降り立つて、岩間の淀みに迷う鱒や小魚を、すく掬い上げ掬い上げておりました。

すると……どうでしょう。まだホンの五六匹しか掬い上げていないと思ううちに、ツイ向うの川隈の岩壁の蔭から、中折帽をまぶか深く冠つた洋装の青年が、たた畳みボートを引っぱりながら、ヒョックリと顔を突き出したではありませんか……。

……私はその青年と暫くの間、しばら顔を見交したまま立ち竦んでいたようです。しかしその中にうち電光のように……これはいけない……

…と気が付きますと、大切なタマ網を腰巻の紐に挿すや否や、崖にブラ下がっていた綱に飛付いて、一生懸命に攀<sup>よ</sup>じ登り初めました…：が…：しかしモウ間に合いませんでした。まだ半分も登り切らないうちに、思いがけない烈しい銃声が二三発、峡谷の間に反響して、私の縄<sup>すが</sup>ついていた綱が中途からプツツリと撃ち切られました…：…と思うと、一旦、岩の上に墜落しました私は、心神喪失の仮死状態に陥ったまま、苔<sup>こけ</sup>だらけの岩の斜面を、急流の中へ<sup>すべ</sup>り落ちて、そのまま見えなくなってしまったものだそうです。

この時に私を撃ち落した洋装の青年が、最前お話ししました新聞記者のAであったことは、申すまでもありません。同時に、この時に響いた二三発の銃声こそはAが私の運命を手玉に取り初めた、

その皮切りの第一着手であつたことも、トツクにお察しが着いて  
いることでしょう。

ただし

但……ここでチョットお断りしておきたいのは、この時までA  
が、私に対して、別段に、深刻な野心を持つていなかった事です。  
むしろAは私という奇妙な人間を発見して、タマラナイ好奇心を  
挑発されて行くうちに、いつの間にか悪魔的な、残虐趣味の世界  
へ誘い込まれて行つたもの……と考えてやつた方が早わかりする  
事です。

手早く申しますとAは、新聞記者一流の功名心に駆られた結果、  
夏の休暇を利用して、旭岳の麓の一軒屋の怪奇を探りに来た人間  
に過ぎなかつたのです。……政敵、函館時報社の飛行機に先鞭せんべん

を付けられて、地団太じだんだを踏んでいた小樽タイムス社と、その後援者ともいふべき谷山家の援助を受けまして、畳ボートたたみと、食糧と、それから腕におぼえのある熊狩用の五連発旋条銃ライフルを担かつぎながら、深淵しんえんと、急潭きゆうたんとの千変万化を極めた石狩川さかのぼを遡さかのぼつて来た訳でしたが、幸運にもその一軒家の主人公らしい怪人物を発見すると間もなく、取り逃がしそうになりましたので、思い切つて私を威嚇いかくすべく、頭の上を狙つて二三発、実弾を発射したものに過ぎませんでした。

ですからAが、その時にドレくらい狼狽致したかは、御想像に難くないでしょう。すぐに畳ボートを押し出して、危険を犯しながら激流の中を探しまわりました、そのうちに、どうしても私の

死骸が見付からない事がわかりますと、今度はタマラナイ空恐ろしい気持になつて来ました。

Aは度々申しました通り、冒険好きの新聞記者です。つまり普通とは違つた神経を持つていた訳ですから、人間を一人や二人、ソツと見殺しにする位のことは、何とも思わない性格の男に相違ないのでしたが、しかし……何しろ人跡絶えた山奥の谿谷けいこくで、水の音ばかり聞こえる寂せき寞境ぼくですからね。そんな処で思いがけなく、奇妙な恰好をした丸裸まるはだか体の人間を一匹撃ち落したのですからね。……何ともいえない鬼氣に迫られたのでしよう。四五日もかかつて遡つた急流激潭げきたんを、タツタ一日で走り下つて、エサウシ山下の谷山別荘に帰り着くと、人知れずホツトいしい、ウ

イスキーを飲んで眠ったものだそうです。

ところがその翌<sup>あく</sup>る朝のこと。何かしら近所の人々の騒ぎまわる声<sup>あ</sup>が耳に這入ったので、何事かと思つてAが飛び起きてみると……どうでしょう。見覚えのある私の丸裸体の屍体が、自分の寝ている離れ座敷の直ぐ下の、石段の処に流れ着いているではありませんか。……その時の気味の悪かつたこと……。あの石狩川の上流で、私を撃ち落した時以上のイヤな気持ちに、ゾーツと襲われたと云いますが、それはそうでしたらう。世にも恐ろしい因縁と云えば云えるのですからね。

しかしその屍体を、そのまんま知らん顔をして見逃がすことは、流石<sup>さすが</sup>にAの好奇心が承知しませんでした。のみならず、その屍体

の血色や何かが、何となく違っていることが、素人眼しろうとめにもわかりましたので、附近の者に手伝わせながら、気味わる気味わる石段の上の芝生に引き上げて、馳かけ付けて来た医者と一緒に介抱をしておきますと、そのうちに意識を回復しかけた私が、非常に高熱に浮かされながら、盛んに譫語うわごとを云い初めたものだそうです。

ところが又、その譫語のうちに、普通人にはチンプン、カンプンの囚人用語が、チヨイチヨイ混っているのに気が付きますと、Aは忽たちまち、今までの恐怖心理から一ペンに解放されまして、見る見る持ち前の記者本能に立ち帰ってしまったものだそうです。つまり是が非でも私の告白を絞り取って、有力な新聞記事だねにすべく、アラユル努力を払った訳でしたが、その苦心努力の甲斐があつて、

首尾よく私が意識を回復してみますと……三度ビツクリ……案外千万にもその私が、完全に過去の記憶から絶縁されている、一種の白痴同様の人間である事がわかった時には、ガツカリにもウンザリにも……今一度タタキ殺してやりたいくらい、腹が立ったものだそうです。

ところがサテその私が、頭や顔の手入れをして、見違えるような青年に生れ変わったのを見ますと、Aの気持が又もやガラリと一変してしまいました。……というのは外でもありません。Aはそこで、一つのステキもない巧妙な金儲けを思い付いたのでした。つまりA独特のりようき猟奇趣味と、冒険趣味とを兼ねた、一挙三得の廃物利用を考え出しましたので、そのままグングンと仕事を運ん

で行ったものでした。

谷山家の内情……特に龍代の放埒ほうらつの底意を、ドン底まで看破みぬいておりましたAは、それから一か八かの芝居を巧みに打って、私を谷山家の養子に嵌め込はんでしまうと、いい加減な口実を作つて、かなりの金を龍代から絞り取つたまま、パツタリと消息を絶つてしまつたのです。

しかもこれを見た龍代は、愚かにも、スツカリ安心してしまつたものでした……というのは、つまりAが自分の註文通りに、どこか遠い処へ立去つたものと考えましたからで、こんな点では龍代も、普通の金持の子弟と同様に、お金の力を過信する傾向があつたのですね。むろん私にもそれとなく打ち明けて、万事が清算

済みになったつもりでいたらしいのですが、これが豈あにはか計らんやの思いきやでした。なかなかそれ位のこと諦らめ切れるAの悪魔趣味ではなかったのです。モットモット大きく、私共夫婦を中心とする谷山家の全体を、地獄のドン底に落ちる迄絞り上げながら、高見たかみの見物をしてやろうという、その準備計画のために、ホンの暫くの間、姿を晦くらましていたものに過ぎませんでした。

Aは先ず、彼の記憶に残っている私の言葉の九州訛なまりと、囚人用語との二つの手掛りを目標にして、探索の歩を進むべく、とりあえず小樽タイムスを飛び出して、九州北部の大都市、福岡市の片隅に在る小さな新聞社に就職しました。そうしてそこを中心にし

た同県下の警察や、新聞社方面に就いて、私の年齢に相当した前科者や、失踪者の名前を根気よく探してまわったものですが、そのうちに偶然にも、福岡市の某大新聞社に保存して在る、六七年前の新聞の綴込みの中から「青年刺客」という大活字を添えた、私ソツクリの大きな写真版を発見した時のAの驚ろきと喜びはドーナでしたらう。ほかの新聞に出ていた囚人姿や、学生姿の写真が皆、私に似ても肖付かぬ朦朧写真であったのに、タツタ一つその紙面にだけ掲載されていた、私の少年時代の浴衣がけのソレが現在の私に酷似していたことは何という奇蹟でしたらう。

しかもそこまでわかるとAの仕事は最早、半分以上片付いたよ  
うなものでした。その社の整理係の連中に知れないように、精巧

な写真機を担ぎ込んで、その紙面ばかりでなく、私の生い立ちや、脱獄の記事を満載した紙面までも残らず複写して、一直線に北海道に帰って来ましたAは、その後の私の動静を、詳細に互つて探りまわった序に、二人の間に愛の結晶が出来かけている事実まで、透かさずキャッチしてしまえますと、なおも最後の脅迫材料を掴むべく、もう一度、極秘密の裡に、石狩川の上流を探検に出かけたものです。

彼はモウその時には、旭岳の斜面の一軒家が、私の棲家であったことを確信していたものでしょう。ですからそこまで突込んで、何かしら動きの取れない材料を掴んだ上で、今の新聞紙面か何かと一緒に、私へ突付ける心算だったのでしよう。

ところがそこまではAの着眼が百二十パーセントに的中していたのですから、先ず先ず大成功と云つてもよかつたのですが、それから先がどうもイケませんでした。

……というのは外でもありません。流石さすがに悪魔式の明敏なアタマを持つておりましたAも、ここで一つの小さな……実は極めて重大な手落ておちをしている事に、気が付かないでいるのでした。すなわち樺戸に訪ねて来ました、女給の久美子の行衛ゆくえについて、深い考慮を払つていかなかったことで、つまり久美子のああした行動は、テツキリ活動屋の宣伝に使われたものとはばかり考えていたのです。そうして久美子自身は、新聞記事と一所に音も香かもなく消え失せたものと、信じ切つていたのですね。これは要するにAの頭が、

アンマリ冴え過ぎていたところから起った間違いでしたが、しかもそのお蔭で折角のAの計画が実に意想外とも、ノンセンスとも云いようの無い、悲惨な結果に陥ることになったのです。

それから約一箇月ばかり経った、秋の初めのことでした。

骸骨のように瘦せこけた身体からだに、ボロボロの登山服を纏まとうて、

メチャメチャに壊れたカメラを首に引っかけた、乞食然たる男の姿が、ヒョッコリ旭川の町に現われて、何やら訳のわからない事を口走りながら、ウロウロし初めました。その男はヒドイ紫外線か、雪ヤケにかかったらしい、泥のような青黒い顔をしておりまして、そのボツクリと凹へこんだ眼窩がんかの奥から、白眼をギラギラと輝

やかし、木の皮や、草の根の汁で染まった黄金色の齒をガツガツと鳴らしながら、川を渡るような足取で、ヒヨロリヒヨロリと往来を歩いているという、世にもモノスゴイ風付きでしたが、更にもットもット不思議な事には、その男の凹へこんだ眼の底に、裸体か、もしくは裸体に近い女の姿がチラリとでも映ると、それが絵であろうと、実物であろうと見境みさかいは無い。破れ千切ちぎれた登山靴を宙に飛ばして、逃げ出して行くのでした。そうして知らない家うちでも、自働電話でも何でも構わない。行きなり放題に飛込んで、救たすけを求めるかと思うと、進行中の電車や汽車に飛び乗りかけて、跳ね飛ばされたりするので、トテモ剣けん呑のんで仕様がないのです。……ええ……そうなんです。近頃は方々の店先に裸体画が殖ふえて来ま

したからね。おまけに秋口といつても、旭川の日中はまだ相当暑いのですからね。何でもソレらしいものを見さえすれば、絵葉書屋の前だろうが、川の中の洗濯女だろうが見境いは無い。又は一里先だろうが鼻の先だろうがおなじこと。悲鳴をあげて狂い出すのでトウトウ旭川の町中の大評判になってしまいました。

ところがそのうちに、そのエロ狂の骸骨男が、ドウ戸惑いをしたものか、旭川の警察署へ飛び込んで、保護を受けるようになり、まずと、世間は又広いもので、意外にもその骸骨男を引取りたいという、篤志家とくしかが現われて来ました。

その篤志家というのは、東京の目黒に在る精神病院の副院長で、その当時旭川に帰省していた、何とかいう富豪の医学士でしたが、

その骸骨男……すなわちAの事を書いた新聞記事の切抜を持って、旭川署に出頭しますと、自分の研究材料としてAの身柄を引取りたい旨を、むね恭しく申出たものだそうです。もつとも最初のうちにAの精神状態を、新聞記事によって判断したその医者には、極めて著明な色情倒錯と思っていたそうで、ステキに珍しい実例として、論文の材料にするつもりだったそうですが……ちようど又、警察でも願ったり叶かなったりのところだったので、厄払いのつもりで、よく調べもせず引渡したものだそうですが……そうなるそこは流石に専門家だけあって、催眠術や、鎮静剤を巧みに使い分けながら、無事に東京まで連れて来て、自分の受持の病室に、首尾よくAを監禁してしまいました。そうして半年ばかり経過す

るうちに、栄養が十分に付いて来て、云う事がイクラカ筋立って来た頃を見計みはからって、なだめつ賺すかしつしながら色々事情を聞き訊ただしてみますと……色情倒錯どころの騒ぎではない。大変な事実をAは喋しゃべ舌り初めたのです。

Aはその副院長の前で、谷山家の秘密を洗い漂せらいサラケ出したばかりでなく、自分の発狂の真原因までも思い出して、アツサリ白状してしまつたのでした。

Aは石狩川の上流を探検して、千辛万苦の末に、ようようの事で旭岳の麓の私の留守宅を探し当てたのです。そうして最早もはや、スツカリ原始生活に慣れ切っている久美子と、四人の子供達が、澄

み切った真夏の太陽の下で、丸裸体まるはだかのまま遊び戯たわむれている姿を、そこいらのトド松の蔭から、心ゆくまで垣間かいま見た訳ですが、その時のAの驚きはドンなでしたらう。夢にも想像し得なかつた神秘的な光景に接して、開いた口が塞ふさがらなかつた事でしょう……のみならずそこでヤット一切の事情を呑み込んだAは、懐中していた新聞紙面の複写の中に在る久美子の写真と、実物とを引き合わせてみた時の喜びは又ドンナでしたらう。これこそ谷山家の一切合財を、地獄のドン底まで突き落すに足る大発見と思つて、胸を轟とどろかしたに違いありません。……その時まではまだ龍代が自殺していなかつた筈ですからね……。

けれどもAはここで又、第二段の失策に足を踏みかけているこ

とに気付きませんでした。つまりAはそこで、久美子と子供達の写真を、何枚か撮っただけで、一先<sup>ひとま</sup>ず探険を切上げて来ればよかったのですが、そうしなかつたのがAの運の尽きでした。……もつともそのような、エロともグロとも形容の出来ないスバラシイ情景を、遠くから眺めたまま引返すというようなことは、新聞記者根性のAにとって絶対に不可能な事だったかも知れません。或はそのエロ・グロの女主人公<sup>ヒロイン</sup>に対して、A一流の冷酷な野心を起したのかも知れませんが、とにかく吸い寄せられるようにフラフラとなったAは、吾<sup>わ</sup>れ知らず熊笹を押し分けながら、その方向に近付いて行ったものです。

すると間もなく大変な事が起りました。

永い間、男氣無しのまま、人跡絶えたモノスゴイ山奥に、原始生活をして来た氣の強い女……ことにタツタ一人でアラユル飢寒と戦いながら、四人もの子供を育てて来た母性が、如何にひょうか慄おそと悍ん狂暴な性格に変化するものかという事實は、普通人のチョツと想像の及ばないところでしょう。……ましてい沉わんやです。ずっと以前に石狩川の方で、二三発の銃声が聞えて以来、パツタリと影を消してしまった自分の夫を、監獄からの追跡者に殺されたものとはばかり思い込んでいた妻の久美子が、カーキ色の登山服に、ライフルを担かついだAの姿をチラリと見るや否や、おなじ監獄からの追跡者と早合点したのは無理もない話でしょう。……何の氣もなく五連発の旋条銃ライフルを担いで、フキやイタドリの深草を潜りなが

ら、一軒屋に近付いて行つたAは、背後から不意打に、猛獣みた  
 ような者に飛び付かれたので、アツト思う間もなく飛び退いてみ  
 るはだか<sup>るはだか</sup>、そこにはタツタ今奪い取つたばかりの旋条銃<sup>ライフル</sup>を構えた、全  
 裸体の女が、物凄い見幕で立ちはだかつている。幸いにして引  
 金の転把<sup>テンパ</sup>が上がつていなかったので、ダムダム弾の連発を喰らわ  
 される事だけは助かつた訳ですが、それにしても女の見幕の恐ろ  
 しさには、流石<sup>さすが</sup>のAも震え上つたのでしよう。女が転把<sup>テンパ</sup>の上げ方  
 を知らないで、間誤<sup>まごまご</sup>間誤<sup>まごまご</sup>している隙<sup>すき</sup>を狙つて、一足飛びに逃げの  
 くと、あとから銃身を逆手に振上げた女が、阿修羅のように髪を  
 逆立<sup>さかだ</sup>てて逐蒐<sup>おいか</sup>けて来る。その恐ろしさ……道もわからない藪<sup>やぶ</sup>だた  
 畳<sup>み</sup>や、高草の中を生命限りの思いで逃げ出して行つても、相手

はソナ処に慣れ切っている半野生化した女ですから、それこそ飛ぶような早さです。おまけにドウしてもAをタタキ倒して、息の根を止めなければならぬ。……子供の安全を計らなければならぬと思ひ詰めた、母性愛の半狂乱で飛びかかつて来るのですからたまりません。

息も絶え絶えのまま野を渡り山を越えて、方角も何も判然わからなくなつてしまつても、まだザワザワと追いかけて来る音がする……と思つうちに思ひもかけぬ横あいから、銃身を振り翳かざした裸体はだか女が、ハヤテのように飛び出して来る。驚いて崖から転がり落ちると、女も続いてムササビのように飛び降りる。小川を躍り越せば女も飛び越す。それが男よりもズツト敏びんしょう捷しょうで、向むこうみず不見みずと

来ているのですから、Aはイヨイヨぎょうてん仰天して、悲鳴を揚げながら逃げ迷う。その中に日暮れ方になると、女はヤツトテンパ転把の上げ方を会得したらしく、数十間うしろから立て続けに二三発撃ち出しましたが、その最後の一発が思いがけなく、Aの帽子を弾はね飛ばしたのでイヨイヨきもたましい肝魂も身に添わなくなつたAは、それこそ死に物狂いの無我夢中になつて、夜となく昼となく裸体女の幻影に脅やかされながら、人跡未踏の高原地をさまよい初めました。

日が暮れて、夜が明けても、まだ女が追掛けて来るらしい風の音が、四方八方に聞こえる。息も絶たえだえ々に疲れて打ち倒れても、睡るとすぐにライフルの音が聞えたり、女の乱髪が顔を撫でたり

する。そこで又も、夢うつつのまま起き上って、青天井や星空の下をよろめきまわるといふ、世にも哀れな状態になつてしまひました。そうしてどこを、ドウ抜けて来たものか野垂死のたれじにもせず、生きた木乃伊ミイラと同様の浅ましい姿で、旭川の町にさまよい出ると、裸体女が眼に付くたんびに飛び上つて悲鳴をあげる。そうかと思ふとどこへでも駈け込んで、

「……タ……大變だ……谷山家の重大秘密だ……二重結婚だ……脱獄囚の妻だ……天女の姿をした猛獸だ……」

なぞとアラレもない事を口走るようになった……というのがAの発狂の真相だったのです。

……とここでこの真相を聞き出した今の精神病院の副院長は、

最初のうち半信半疑だったと申しますが、それは当然の事だったでしょう。初めから終しまいまで非常識を通り越した事実ばかりですからね。……しかも念のために病院に保管して在ったAのボロボロの登山服を調べてみると……ドウでしょう。Aの言葉が一言一句、真実に相違ない事を証明するに十分な、畑中昌夫と谷山秀麿の戸籍謄本や、新聞紙面の複写フィルムを、内ポケットから探し出したばかりでなく、メチャメチャに壊れたAのカメラの中に、タツタ一枚無事に残っていた、私の妻子のグロ写真を現像する事にまで成功したではありませんか。

副院長はそこで初めて、Aの精神異常の回復が、谷山家の重大問題となるであろう事実気が付いたものでした。そこで早速、

私に宛てた至急親展で、事のアラマシを通知して、事実かどうかを問い合わせた訳ですが、その手紙を受取った時には私も、思わずサインとなりましたよ。

むろんその手紙には、学術研究のために問合せるのだから、仮<sup>た</sup>令<sup>と</sup>事実であつても絶対秘密にする……云々という追<sup>お</sup>而<sup>つ</sup>書<sup>が</sup>が添<sup>き</sup>え  
てありましたし、問題の龍代も、最早トツクにお位牌になつて  
いた時分のことですから、私の心配も半分以下で済んだようなもの  
でしたが、しかし、それにしても重大問題には相違無いので、取  
るものも取りあえず上京して目黒の精神病院を訪問してみますと  
……又もサインとするほど脅<sup>お</sup>か<sup>び</sup>されたのでした。頑丈な鉄の檻の  
中に坐り込んでいた、患者姿のAは、とりあえず見舞いに来た私

の顔を、ハッキリと記憶していたばかりでなく、何やら訳のわからない紙片かみきれを鉄棒の間から突出しながら、辻褄つじつまの合わない脅迫めいた文句を、私に向って浴びせかけるではありませんか。むしろその紙片かみきれは、私の事を書いた新聞の複写か何かと思ひ込んでいたものに違い無いのですが……。

私はその複写拡大紙面の実物と、ブロマイドに焼付けられた妻子のグロ写真とを並べて、副院長の自室で見せてもらいましたが、それを見ているうちに初めて、自分の過去の記憶を電光のように呼び起す事が出来ました私は、あんまり烈しいショックを受けましたために、一時失神状態に陥ってしまったものです。

しかし間もなく、副院長の介抱によって正気に帰りますと、私

は、すぐに非常な勇気を奮い起しまして、Aが自白した一切の事実を確認しました上に、尚なお足りないところを詳細に、副院長の前で補足してしまいました。そうしてAの一身に関する相当の保護を依頼すると同時に、私の前身を公表するかしないかという重大な判断はタツタ一つ……副院長の自由意志に一任しまして、その旨を半はんきちがい狂人のAに詳しく云い聞かせますと、そのまま北海道に引上げてしまいました。これは申すまでもなく、万一、私の前身が公表されました場合、落付いて刑に就くべく心用意をしておくためでした。……いくら他人の秘密を預るのが商売の精神病医でも、これ程の秘密を握にぎり潰つぶすのは、容易な事であるまいと思いませんからね。

……エツ……何ですって……。

私の話がトンチンカンですって……。

これは怪けしからん。どこがトンチンカンですか。私は立派に順序を立ててお話ししているつもりですが……。

何ですか……その新聞記者のAという男の本名は、まだ思い出さなおっしやいかって仰おっしや有るのですか……サア。それがまだ思い出せないのですが……モウジキに思い出すだろうと思っおっしやているんですが……。

……オヤ……何故お笑いになるのですか。

へエ。ここがその目黒の病院なんですか。へエツ。それじゃA

君もここに居る訳ですね。へエ——ッ。ほんとうに居るのですか。……ちつとも知らなかった。イツタイどこに……。

エッ。……ここに居る……。

……ナ……何ですか……私がその新聞記者のAだと仰有るので  
すか。御冗談ばかり……私は只今も申しました通り、谷山家の養  
嗣子秀麿ですが。その久美子という、猛獣天女の亭主に相違ない  
のですが……龍代と二重結婚をしたアノ白痴同様の……。

エッ。その秀麿……谷山家の養子になった私が、ここに入院し  
た原因をお尋ねになるのですか。そ……それはその……その発狂  
当時の事ですからチョット思い出しかねるのですが……。

……お笑いになっちや困ります。鏡なんか見なくなつていいで

す。自分の顔は自分でちゃんと知っております。

……ナ……ナ……何と仰有るのですか。その谷山秀麿は、今でもやはり谷山家の養子になって、盛んに事業界に活躍している。後妻には山の中から久美子を迎え出して、谷山夫人を名乗らしている……そ……それあ怪けしからんじやないですか……二人は今後、絶対に人間世界に帰らないと云つて、あれ程固く約束していたのに……イヤイヤ。私の想像なんかじやないのです。事実には相違ないので。実に……ジツに怪しからんですなあ……。

へエ。何ですつて……この副院長から与えられた暗示で、美事に過去の記憶を回復した谷山秀麿は、北海道に引返してから間もなく、副院長の誠意を籠こめた手紙を受取つたので、ホツト一息

安心することが出来た。そうしてAの一生涯を、病院で飼殺しに  
してもらうように、折返して返事を出すと、すぐにタツタ一人で  
極秘密の裡うちに、旭岳の麓へ久美子を迎えに行つたのですか。へエ  
……そこで流石さすがの猛獸天女だった久美子も、なつかしい昌夫なみだの泪  
ながらの告白に負けてしまった。ハハア……作り飾りの無い、昌  
夫の純情に動かされた結果、龍代の身代りになつて、谷山家の一  
粒種……龍太郎を育て上げるべく、涙ぐましい決心をした。成る  
程……そこで四人の子供を左右に引連れた猛獸天女が、はるばる  
と人間世界に天あまくだ降る事になつたが、それに就ては昌夫の秀磨が、  
思い出深い石狩川の上流から、エサウシ山下の別荘まで、人に知  
れないように連れ込むべく、アラユル苦心を払つたものである。

いかにもねえ……それから久美子の戸籍面の届出や、子供の行儀作法のテストに至るまで、又もや惨<sup>さんたん</sup>憊たる苦心研究を積ませられたものであるが、さてそのあげく、イヨイヨ一行を谷山家に乗込ませて見ると、案ずるよりも生むが易いで、久美子の奥様振りが頗<sup>すこぶ</sup>る板に付いたアザヤカナものだったので、龍代の再来という評判が立って、一躍、界隈の社交界をリードするようになった。同時に家庭も極めて円満で、五人の子供達にミジンの分け隔ても見せないから、将来、谷山家の秘密に気付くものは絶対に出ない見込である……だからその事に就ては、絶対に心配しなくともいいと仰有る……ナア——ンダイ。馬鹿にしやがらア……。

イヤ……アハハハハ……これあ失敗<sup>しくじ</sup>った。うっかりネタを曝<sup>ば</sup>ら

しちやった。

アハハハ。実はね。先生をドウかして一パイ引っかけて、マンマと首尾よく退院してくれようと思ひましてね。この間から寝ないで話の筋を考えていたんです。そうしたらツイ今サツキ尻餅しりもちを突いた拍子に、自分の経歴を思い出したような気がしたもんですからね。こいつあ占しめたと思つて、すぐに先生の処へ来たんですが……ハアテネ……。

俺は一体、誰の経歴を思い出したんだろう……自分で調べた他人の経歴を思い出したんじゃないか……ハテ……いけねえいけねえ。モットよく考えて来れあよかつた。どこかに辻褄の合わない処があつたんだ……。ヨオシ……今度こそは……。

エツ。昨日も僕が同じ話をしに来たんですつて……一昨日も……おととい

……ズツト前から何度も何度も……アノ僕が……へエ……。だから先生の方でも、谷山さんに頼まれた通りに、繰り返し繰り返しくわ詳しい事情を説明して、ヤキモキしないように云つて聞かせているが、ドウしてもわからない……僕がですか……へエ。おまけに自分の事と、他人の事とをチャンポンにして考えたりするので、話がだんだんトンチンカンになって来る。だから君のアタマはタシカでない。谷山家の事なんか忘れてしまつて、モツト気楽に養生しなければ、いつ退院出来るかわからない……へエ——……。それあ誰のことですか……エツ……僕のこと……へエ。そうして貴方は……。失礼ですが、どなたですか。

エツ。副院長の助手さん……一緒に僕の心理状態を研究している……。

……ウワア……しくじったア。それじゃ何でも知っている筈だ。僕は又院長さんかと思った。院長さんなら、まだ一度も僕に会ったことがないから、もしかすると一パイ喰うかも知れないと思っただんだが……いけねえいけねえ……。

アツハツハツハツハツハツハツ……。

ああア——ツ。くたびれたアツ……ト……。

ねえ先生……話し賃に煙草を一本下さいな……。

……オヤア——ツ。誰も居やがらねえ……。

ここは監房の中だ……おかしいな。俺あサツキから一人で饒舌しゃべ

つてたのかな……フーン……イツタイ何を饒舌しやべつてたんだらう……。

……桐の花が、あんなに散つてやがる……。

……アツ……忘れていたツ……。

俺あ龍代に復讐するつもりだったんだ……彼女あいつは俺に肱鉄ひじてつを喰わせやがったんだ……妾わたしをオモチャにするつもり……つて冷笑しやがったんだ。だからその通りにしてやったんだ。前科者を亭主に持たして、一泡吹かしてくれようと思つたのが、間違つてコナナ事になつてしまつたんだ。あべこべに俺がキチガイ扱いいされる事になつたんだ。

エエツ……コンナ籠<sup>べらぼう</sup>棒<sup>ぼう</sup>な……不公平な……。

俺あ谷山家に怨みがあるんだ。ココを出してくれ。不法監禁だぞ畜生……ドウスルカ見ろ……龍代の阿魔<sup>あま</sup>……。出してくれ出してくれ出してくれくれくれ……出してくれツ……。出して……くれエエエ——ツ……。

## 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集<sup>8</sup>」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年1月22日第1刷発行

底本の親本：「冗談に殺す」春陽堂

1933（昭和8）年5月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号<sup>5</sup>-86）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：しず

2000年10月26日公開

2006年3月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# キチガイ地獄

夢野久作

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>